

映画界に変革をもたらした女性の生涯

中野 理恵

本作は、世界で初めて物語映画をつくった、フランス人女性アリス・ギイの生涯と業績、そして、彼女が映画史から無視された事実についてのドキュメンタリーである。

1873年生まれのアリスは、21歳でフランスの写真機材会社ゴーモン社に、社長秘書として就職。1895年に、リュミエール兄弟による世界初の映画『工場の出口』や『列車の到着』がつくられたのを知り、「記録するだけの映像は退屈。映画で物語をつくったらどうか」と社長に提案。すると、本業に差し支えない範囲ならば、と社長からお許しをいただき、翌1896年、『キャベツ畑の妖精』（1分）をつくった。世界初の物語映画の誕生である。

アリスは1907年に結婚し、夫と共に渡米。ソラックス社を立ち上げ、米仏で20年以上に渡り、1,000本以上の作品の脚本を書き、監督・製作をした。中には300人以上のエキストラを使った『キリストの誕生』（1906年／33分）のような大作もある。音の同期やクローズアップ、着色などのテクニックも開発。技術面だけではなく、人種問題や性別役割分業などのテーマも積極的に取り上げた。出演者全員がアフリカ系アメリカ人の『愚者とお金』（1912年）、移民が題材の『アメリカ市民を作る』（1912年）、男女の役割を逆転させた『フェミニズムの結果』（1906年）では、女性がカフェでタバコを吸いながら政治を語る間、男性は家で洗濯する等々。その風刺の効いた描き方は楽しんで、少しも古びることなく、100年後の現代でも「くすっ」と笑ってしまう。〈新しい!〉と評価されそうな作品揃いである。

だが、クレジットには彼女の名前ではなく、助監督など男性の名前が記されていたのだった。後年、アリスは自分の〈仕事〉であったことを回復



©2018 Be Natural LLC All Rights Reserved

しようと奔走する。

パメラ・B・グリーン監督は、本作の源となった著作、アリス・ギイの自伝『私は銀幕のアリス - 映画草創期の女性監督アリス・ギイの自伝』（邦訳発行パンドラ、2001）を頼りに、映画史から消されたアリスの足跡を8年間に渡り調査して、本作を完成させた。インタビューに答えるのはアニエス・ヴァルダ、マーティン・スコセッシ、ベン・キングズレーなど、日本でもお馴染みの映画人が顔を揃え、ナレーションはジョディ・フォスター。プロデューサーのひとりにはロバート・レッドフォードなど、多くのハリウッド映画人が名を連ね、さながらハリウッドが総力を挙げて製作した感がある。

ちょうど、この文章を書いているときに、キャサリン・スウィツァーのことを知った。1967年、女性の参加が認められていなかったボストンマラソンに性別を隠して初めて参加して完走した女性である。女子マラソンの歴史はわずか50年だったとは！

《Cinema Information》

『映画はアリスから始まった』

アメリカ映画(103分) / 監督: パメラ・B・グリーン / 7月22日(金)よりアップリンク吉祥寺ほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館、2018)等。